

1. 問題で取り扱う具体例の入力規模が比較的小さいことが分かっており、最大の規模の具体例でも、実用的な時間内に解が出力されることが判明しているアルゴリズム(プログラム)の場合、例えば、ビット数 n が 128 の数の積を計算するアルゴリズムを考える場合、 n が 1000 より大きなところでの計算量を議論してもしかたがない。本書の最終章で扱うハードウェアアルゴリズムなどは、そのような例になっている。
2. 計算量の違いが定数の差しかないようなアルゴリズムを比較する場合、例えば、最大と 2 番目に大きい要素を見出すアルゴリズムでは、最悪の計算量をオーダーで表してしまうと、その違いが隠れてしまう。